

エントリー名：相模原市立桜台小学校 木谷 隆人

学校名：相模原市立桜台小学校

活動名：学びを通して自己肯定感を高める
 一人学習となかよし探究の取組を通して

解決すべき課題：自分から行動、新しいことが苦手、学びに受身の理由は自己肯定感の低さ



目標・方針：本校児童のよさを生かした取組から始める

本校児童のよさ 人なつこさ <small>異学年遊び、クラブ活動等における関わりやすさ</small> 素直に取り組む <small>課題を提示されると、一生懸命取り組む</small>	児童のよさを生かす取組と期待する児童の姿 異学年での学びの機会保障 ◎リーダーシップ発揮、教員含めて自分に自信 ◎上級生への憧れからの目的意識 一人一人に合った学びの時間保障 ◎自分に課題設定する力が高まり、主体性アップ ◎自分に合った学びで意欲に力をつけ、自分に自信	自己肯定感の高まり
--	---	------------------

活動内容：児童のよさを生かし自己肯定感を高める「なかよし探究」と「一人学習」の取組

1. 教育課程への位置づけ
 異学年による学びの機会としての「なかよし探究」と、一人一人に合った学びを保障する「一人学習」を教育課程に位置づけ、学校全体での取組とした。週2コマの「なかよし探究」は、異学年での関わりの中で、自分のよさの自覚、発揮を通して自分の可能性に気づいたり、協力するよさを実感したりする機会とした。また個々で課題を設定し、それぞれのペースで学習に取り組める「一人学習」の時間を週2コマ程度位置づけ、自分で取り組む時間を保障した。

2. 異学年での関わりを生かした「なかよし探究」 **【なかよし探究(1~3年)】**
 学級を解体し、30名程度の1~3年生のグループと、4~6年生のグループを構成し、このグループを単位として「なかよし探究」を行う。1、2年の生活科、3~6年の総合的な学習の時間を充てている。双方のねらいを達成できるように、なかよし探究カリキュラムを設計し、年間50時間程度で展開している。

1学期、2学期、3学期のまとまりで活動の基本テーマが設定され、グループごとに探究することを決めて取り組む。活動は、なかよし探究教室で行われ、各グループの学年児童がリーダーシップを発揮して、探究活動に取り組む。

3. 個々の学びを保障し、自ら学が意欲を高める「一人学習」 **【一人学習の取組】**
 国語と算数を中心に、各教科の中で「一人学習」の時間を設定している。週2コマ程度を設定し、①めあての設定(記入)、②一人学習、③学びの振り返りという基本的な流れで進めている。取り組む内容は、子供によって異なっていてよく、自分自身を高めるための課題を設定して取り組む。学年段階に応じ、教師が提示した課題から選択して取り組む場合もあれば、個々で準備して取り組む場合もある。基本は自分で取り組む時間だが、教員の指導や助言をあおいてもよい。

取組の過程：職員間のコミュニケーションの充実と目標の共有で活動を始める

1. 活動をスタートさせるための職員の共通理解と協働性の発揮
 指導への不安要素を取り除き、見通しと活動への価値や意欲を見いだせるように、①教育目標の共有、②日常的な談話の充実、③確かな時間保障を中心に進めた。①~③の方策により職員は活動への不安が少しずつトライする気持ちへシフトし、総括会議や職員会議においては、前向きな意見や考えられる課題への対応策等が提案され、年度初めからの取組スタートにこぎつけた。

①教育目標の共有
 学習指導要領の改訂とキャリア教育推進の市の方針に応じて、職員全体で本校の実態(児童、職員、学校、保護者、地域等)と身につけたい力を共有し、教育目標を5つのキーワードで整理した。教育計画や学級学年経営案、学校評価等にも反映し、職員はもちろん児童、保護者も共有できる形にした。この共有した教育目標と、「なかよし探究」や「一人学習」の取組が合致することを諸会議等で共通確認していった。

②日常的な談話の充実
 会議等ではない場での職員間のやりとりの充実を図った。職員室内に設置されていた壁を取り払い整理整頓し風通しのよい職員室づくりを進め、ミーティングデスクや雑談ができるスペースを確保、職員のコミュニケーションの充実を図り情報共有しやすくした。そういった環境の中で、新しい取り組みについて学年主任からアイデアを吸い上げたり、学年会で情報提供したり意見交換をしたりし、職員全体の声を反映し取り組みの見通しや価値がもてるようにした。

③確かな時間保障
 教育課程編成において、内容と目的に応じた適正な時間数の配当を行った。休校措置の際のカリキュラム編成を生かし、2つの活動についての確実に時間が保障できることを示した。年度初めに学年ごとにカリキュラムマネジメントの時間を設定し、計画準備の時間を保障した。

2. 取組を進めながらの課題解決
 2つの取組は新しく、進めていく上でも不安は多い。ポジティブに活動を進めていくために、重点と進め方を共有する時間と機会の保障、計画のミーティングや作業の設定を中心に進めた。「なかよし探究」については基本カリキュラムとともに学習材を例示し、異学年交流を重点にすることやなかよしグループでの活動の進め方などを共有した。職員全体での作業の時間やカリキュラムデザインの時間を保障したり、それぞれの取組を Google workspace で共有したり、活動に関わる情報が共有できる機会の充実に努めた。「一人学習」については、推進している職員からの情報発信や実践の交流、取組の振り返りを Google フォームで行い情報を共有した。先行事例やアイデアの出し合いは活動に不安をもつ職員に有効に機能し、それぞれの実践を支えた。

活動の成果：2つの取組のよさが、自己肯定感の高まりと児童の課題の改善へ

「なかよし探究」では期待したとおり、異学年活動のよさと見られる児童の姿が成果である。上学年児童が下学年児童をリードしたりサポートしたり、頼られることで自分への自信を高めて取り組む姿、下学年児童が上学年児童にあこがれをもち目標とする姿等、自己肯定感の高まりにつながる姿が見られた。また学校評価では保護者から高評価を得ており、「高学年が低学年と何をして楽しく過ごせるか自分達で考え、低学年は、高学年になった時の目標として目指すべき姿が身近に感じられて、良いと思う。」等、保護者からの肯定的なコメントが多く寄せられている。

「一人学習」においては、昨年度の11月に実施した児童アンケートで、「一人学習ではめあてをもって取り組めたか」では「取り組めた」の回答が77.8%を占めた。「一人学習の時間が自分にとってどうだったか」については、「ちょうどよい」「少ない」の回答が合わせて83.8%を占め、本校児童が自分自身で学習を進める価値を見出しつつある実態が伺えた。高学年児童については予習する児童が増えたり、学習したことの活用を自分から行う児童が増えたりしたと担任が報告している。Chromebook 活用の定着も一人学習の取組を後押しした。教室においては皆が同じ課題に取り組むのではなく、個々に応じた様々な内容・方法の学びが保障される雰囲気定着してきている。また、教員の個別支援が充実したことを大きな成果として職員は挙げる。個々の自律的に学ぶ姿勢の定着により、手をかけたい児童にある程度の時間を割いて支援することが可能となった。**自分にとっての確かな学びを一人ひとりが実感し、自信を高めていく姿が見られた。**

「なかよし探究」「一人学習」は、はじめて間もない取組であるが、確かな成果が見て取れる。取組を進める上での課題を1つ1つ解決しながら継続し、自己肯定感の高まりにつなげたい。

